俳諧七部集

阿羅野
附 員外

七

へ 5
5625
7

京都帝國大學圖書

曠野集員外

誰か華をおもはさる世と花か
市中にありて朝のけしきを見ん
又舞しける東四明の麓より
至て花のこゝろかこ紀をさんとれ
とりて佐川田喜六のよしの山
あさな〳〵といへる哥をも実
さうんす文

麥喰し鴈とおもへどわかれ哉

此句尾陽の野水子が作にて
芭蕉翁の傳へしかるなくさめ

門へ 號5625 冊7

笑しにはいつ比田野へ来よりて
実も世句成感をむかしあまた
さまざる人の中に虎の尾信をと
どらまに進をならする人あつまるく
独る色を歌姿をしてゐるよし漆の
松風へうこさ深けり花のごとし
穣をそへて實に下るよし邑の
あるといへるも實の字老の
杜乃こころなるをや松風の
句我するひて

麦をわすれ華におぼれぬ雁ならし　素堂

この文人乃みつこの家のごとく
とらけ流しをこころ人をきく
掌故を吟して

まつさしかさすみ峯秋のけ絶ぬ　野水
穐の頭をそぎろくものまて　荷兮
此の末かなる松し茶う割　越人
門跡名月待闇のやまひあり　水
風の月利を知秋乃なく　兮

武士乃鷹うつ山もほど近し　人
まきわりてついて鍛の鍛きる　水
袋から経とも出家のうしろ、　今
清ふと降ら流くる時もうる　人
吉之里松の直に為乃塢　水
千句ほとなむ小山ぬてらし　今
姥さかり一重桜も咲残り　人
あてもなき夕月夢くの数　水

露の身を涙の雲かゝる袖の月　今
秋ぞなきもの盗人乃妻　人
ゆるがら西も東も鐘乃音　水
きのふ今日まる利根の川舟　今
冬の日飛てかくして加賀星雲　人
象子ありしと綢織から算子　水
ふらくときの畑の市の場へ　ちる　今
狐つまを出人かえろしまし舞　人

柏木の脚気の比のつくしと　水
さくやさくとのこゝろ咲へつる　今
月乃影かさね合てたり辻か攫　人
秋ことなる除とうく事墨乃硯桶　水
高ふまく純上の鏡く出る著色て　今
うれしとおの娘乃彼乃本脆　人
かしこまる諫之涙こほるらし　水
火箸ならべてまろく炭のあつまき　今
うくすその人をとゝと人の足をと　人
みせさとゆへて池乃かへとて　水
むさの事都もいまさかうくす　今
操らく素婦の手かなの案　人
墨ろの皮を正月をにわさ繋つ　水
大根きさみてテうよいそかし　今

遠浅や浪に志めさす蜊とる　亀洞

はるの舟間[illegible]酒のあさき哉　荷兮

のときしや[illegible]泊に荷を解て　昌碧

百足乃懼る菜[illegible]　野水

夕月の雲の白さを[illegible]　舟泉

衣寒の襲を裾[illegible]　釣雪

萩乃露をこととも知らぬ所そや　筆
一駄おろして見えし古綿　亀洞
その色をさき着もしてる宮祢々麻　荷兮
京すゞむしや松毎に千家　昌碧
いくつともなくてめつらん蔵造　釣雪
湯殿まてはものもなくむ別しや　舟泉
涼しやさ葱をもてくる川の増　野水
らうかされしめて添月　荷兮

秋風わし女車の髪ねとき　亀洞
袖そ露けき嵯峨の法輪　釣雪
鳴くしまかのさへくちぬ地のおち　昌碧
にも山咲色ところちなるへし　野水
日乃いてやたふれ作さん腹より　舟泉
ゐやあけすし土ともぬあかれ　亀洞
向まてし実やるほどの小ふろにて　荷兮
掂離かく人の着ものくらぬ　昌碧

配所にて干魚の加減覚えつゝ　釣雪

このうらふるき身のあそびく　舟泉

むく起ておひつきて赤膝を　野水

門をとをり菊子よひても　荷兮

いかさみてし足軽町の藪添し　亀洞

松毎にゐとめしこれもこそ雨風　釣雪

ふ色とかきなすものの下り九月　昌碧

やゝさつ秋乃やさしあかの涼　野水

つくゞと松風わたる寮の窓　舟泉

手志かなもゆゑ安房乃小湊　亀洞

夏の月やみてあるく泥の照かて　荷兮

桶のかつきを手入しまひならし　昌碧

人なきこと脚気さして四より　釣雪

ついふくるに為る精進　野水

夏しば艶くさけり菫の花　舟泉

柳のうしろかゞやくあり乃卯　松芳

夕霧深ぬをゑてうきもしん　冬文

きゝいさやまみゆる月影　荷兮

秋草のえてもおもさ径ほとゝ晩　松芳

弓ひきあつる勝相撲とく　舟泉

なまちの拾ハむところ知る　荷兮
ふみおとし谷の中なる木のはし　冬文
炭竈の皮引よせて尋ゆく　舟泉
識え嬉しやしひとり笑はつ　松芳
なるとみ宗鳩まつしてそ落はなる　冬文
酒の半に膳もちてたつ　荷兮
幾年ぞ順礼もするにおしき　松芳
とまて双六の絵をみとまゝる　舟泉

なかつりもぐら志をもたゐる心の虫　荷兮
月のおぼろやなる弁乃天　冬文
灯火は粉ひつてまちの風　舟泉
聯除をうちのぞて脇息のうへ　松芳
隠居をも入歯に春の志るゝ　冬文
十日のきくおしなるし　荷兮
山里の秋めづらしと生鰯　松芳
手拭かふくみへるやいさむ　舟泉

さふくとかつの紙ならする月の影　荷兮
馬乃とゝを渉してゐるのいなゝく　冬文
さひしさに金井の宿のむら雨　舟泉
莚ぬぐまで蕎麦あふつ中　松芳
つくつくと郷すみなるものゝやさしく　冬文
蟷螂のく提婆品よむ　荷兮
けしの花さて跡をとするゝく　せめよかり　松芳
味噌するなまじの隣しさへかし　舟泉

芸畠乃門さゆうけよ薪分　荷兮
沾りくよあてゝ尺なる　冬文
春雑穀赤貝をさしてあふる焼　舟泉
穀えさもとるもちをん旅づら　松芳
こゝにくはや瀑布をかひな　あをとこめて　冬文
思ふつ面白き山口の家　荷兮

やゝこえす諸艶心のれもふとし　荷兮

雨のわの飛ふさゝてる戸の口　野水

引捨し車ハ琵琶のかとぎにて　同

あくさうなくくも人のうしかい　荷兮

月の秋旅乃きさて出る也　同

一荷になひし露乃きくらけ　野水

初あらしあらせの豪の坊主に　水
菜畑ぬむ肌をとちらとうちさうた　兮
土肥を多くしくさよせとく　仝
亦下刹付とし紳そめつきり　水
通ひのついきとこけて迎かへて　仝
六位のあるし　点のくハさき　兮
代よいとこてやさしく　と清れひく　仝
錢一貫く経　一　節し　水

月乃影蔦這まくい擲くる舞　仝
茶咲に禁とゆよみてなり　兮
天仙蓼らし冷食あさしき於暑　仝
うちかゝけくる着　経の中　水
たく人となる禁てまつねらたと直　仝
夕せましきはつひてやしる　兮
駒の管眺めき信農さ大甲変　水
秋のあらし　く肯降　楊楊　兮

乗てうくたよそ沖まゝし　生見塊　水
八日乃月のちゝさやしいるまゝく　今
山乃端よ松と桃とのかすしの前　水
きほそくるもとてつくくさくとする　今
鼻さきはや服のまくらて引結ひ　全
太鼓たゝ鳴り階子乃あるゝ　水
うつくし出家する木賃の竹枕　今
乳たそのくさやし新年くれる　水
思ふともまゝぬ都まて一二年　全
庇をつきて住居かくろ燃　今
三方のおむつりしもやまくゐる　全
供奉乃竹鞋を谷へたきこみ　水
隠しやいへ小塩大原嵯峨の春　全
人おひまりはるの川
岸　筆

月さしのほるまては昼の白さをかな　嵐雪
おもしろさや柄をさしてくれとくとくと
闌は宗鑑法師の句をすゝむしらぬ　本長て
夏の夜は疵となし　なの代を師をやすますつて夜

月に柄をさしたらはよき団扇かな

蚊のなくはなるほと夏の暑さ哉　越人

さみたれや誰か色入てころふん　傘下

初ひろひさし錦さのをくら　同

まだ来ぬ柱つくえ松さへてくはかくも　人

使の者かしらるしまてもち来ぬ　同

あれこれと猫の子を選るさわしさに　筆
とし寄るまてあほうしかり　下
とこてやる手の筋見えて物思ふ　同
まくれもさけて泣もうすいのか　人
大隅乃人は法華とこあさかく　同
月さらりとて韓紙繩手津　下
吹ふ様も又くふうさも皆濁し　同
秋乃きしされ細みるかな　人

月のかたくいつら此堂と背くへき　同
寝たるのく書ら文字読ゆるむら　下
花の頃くさへうて匂へる波花め　同
暮うもの鶏飲こそさまくの様あ　人
うら寂しく浦の鏡風の擢手ふく　同
内へ入いつてなるを於ゆり大　下
醉さめの名残惜しさは嗜み知　同
多くも津り水流雨乃降出し　人

歌あそぶ揃る難首おいとまし　同
まゝ献立の風ちらぬ花の下　下
竹其ある油さほして押かくし　同
何となくせんさいかしまて死　人
嫁く風て息のさゝくらのふらしと　同
半ちこさす紅蟾や乃秋　下
むつくしと月さる影の秋ゑ經　同
人の績てまさる川さもあし　人

にきやかしく気や笛や走る荷ひ也　下
亍を決ゑての二所町中　人
むかしやし小法の宿は暮時々　下
皆同為よ中し二ゐ佛　人
百万よくるひ所きぬそら春　下
田楽さ佛くさかる掛しさ　人

深川の夜

雁がねもしづかに聞ばからびずや　越人

酒しゐならふこの比の月　芭蕉

藤ばかま誰窮屈にめでつらん　仝

理をはなれたる秋の夕ぐれ　越人

瓢箪の大きさ五石ばかり也　仝

風にふかれて帰る市人　芭蕉

なかなかに長安は是名利の地　仝
醫のおほきこそ目のつかひ成　越人
いそかしと師走の空に立出て　芭蕉
ひとり世話やく寺の跡とり　越人
此里に古き玄蕃の名をつたへ　芭蕉
足駄はかせぬ雨のあけぼの　越人
きぬ〳〵やあまりかぼそくあてやかに　芭蕉
かぜひきたまふ声のうつくし　越人

手もつかす昼の御膳もすへりきぬ　芭蕉
物いそくさき舟路なりけり　越人
月と花比良のたかねを北にして　芭蕉
雲雀さへづるころの肌ぬぎ　越人
破れ戸の釘うち付る春の末　仝
人をはさらしこそ麦ひきの戸　蕉
家なくて服紗につゝむ十寸鏡　人
ものおもひゐる神子かものいひ　蕉

人去ていまだ法坐乃匂ひける　人

初瀬に籠る堂の片隅　蕉

ほとゝぎす鼠のあるく宛中さ　人

垣穂のさゝげ露もちこぼれく　蕉

あやにくに姉は妹が夕あの文　人

何の冬しこそたゞなみさつむ秋　蕉

ゆふ月移て移ろる湖さまに　人

旅も遠く鞍りいねふり　蕉

秋の田をからせぬ公の孫もひさく　人

さいくしゐゝ文字問さる　蕉

いろ紙しく瓦庇から木葉屋　人

縫ぞ之蘭影子乃神く久ひなき　蕉

宅の沈儀義を命ちくやはし　人

寄ゆし　をゝはく腥をさくち　蕉

翁に伴なはれて来る人のめづらしきに

落着に荷兮の文や天津雁　　其角

三夜さの月見雲なかりけり　　越人

菊萩の庭に畳を引ずりて　　仝

飽てわかるゝ茶てみよなる　　角

誰か手て縫くうけさる旅衣　　仝

齒をまとくはへあのゝ　　人

帰らるゝ間ふさるゝと俳かりく　人
静御前く舞をするなり　角
空蝉の雛型の紙ふゝしはよ　仝
あとへ出る金二両ゐ　人
いとをしさ子を他人にも見せとり　仝
やけとかをしてつまれ　角
間髪さ耳くつきうさき　仝
夕顔をもつ無月の名残舟　人

そもいろの富士と隣か秋の紙　仝
谷ふく吹しける草乃一瓶　角
饅頭ちら紙しさ沙く包ミ出る　仝
うきせまつりて死ぬ人ハ損　人
西も毋東方朔も同じはへす　仝
よしや鸚鵡の舌乃よしみさ　角
あらさなやそてさまく歌の妻　仝
恋の秋さかふ夜のまん　人

やゝ杉毎ひる寝とし打て納すらみて　仝
茶つくる着る師しきなかりけり　角
夕霧の香をきく服乃袖博　仝
此川の紅を乞ふ強力　人
完いちよ座うちもひ草枕　仝
ひいなさりて伊勢の入聟　角
満月と不断桜を詠ぬるや　仝
念者法師も秋のあはれの総　人

夕まくれ出はしたなき息子書き　仝
弓ちやうひく竹の実あまきのまと　角
痩たるとり乞食の独身住ゆひて　仝
ゑのころ見の如鳥士の園とな　人
花の色あちら傍つき胆ことつや　仝
むしろ返へさ嘆猿乃春　仝

嵐雪

衣そうし聟酒ハ人の醒安紀　越人

秋うそ寒しいつも湯婦　仝

月の宿書を引ちらす中に寝て　雪

外面薬の草ほしにけり　仝

もくあひて牧ともしらぬ里のる　仝

川越る綱も城下のこはい　人

疱瘡は皃の透とをるかゝ盡の　人

唱哥の色と志てす壱ありける　雪

あさくみるもみ紙くのさくすき　同

後にひよ人やいつのまにあさき　越

としよるまで由あるをする名ぬすき　人

河鹿なるゑてかへる浪人　嵐

真柚を礁まうてとし川腕　雪

明日とも髪そるもやの月影　越

さくらの群ゝにみる女房　人

つきるの醫者乃後姿や　雪

ちるむまり月をくるれとも是ほ　越

ようめくるとて何をいふらん　人

旅雲やことしのひさる桐の末に　野水

月のみしるき也そくの霧起　落梧

山川や鵜の喰ものをさかすらん　仝

絲ノあみ遠かゝしんえかまくろ　野水

杉ゆきさま押合月を草臥つ　同

あくらくしくしも櫃から萩　落梧

川越乃歩ミさへ許り縄の雨　水

れふと痛くのる秋のさゝなき　梧

ワらせてをかりなくかくす椽の下　水

すゝき葛の葉のうすりとひ　梧

更る夜の師をむつましと承欣く　水

こそくり起す相伝の僧　梧

峯の松あちあちあちりを見おとり　水

旅ものうちのん書羅さ　梧

京は女子かゝのぬまことも一文さ　水

下々人も背いく月の木のそろき　梧

耳せ薗やくゝりても沙汰殺なす　水

早に是見えさ猪はえふの新年　梧

いつ川やうも早る字ぬ四おくれ　同

山伏役てゝ人志ゝ保なりおまへ　水

くりうりしとくきひぬきゝる菜車　梧

桃折る乞祢園は白き桃　水

阿くりを頭まで被き振おほひ　梧

言かく独もいは地津紙なさ　水

まつりとのやうる馬にくきのせく　梧

うろふ府中を銘孫ふうり　水

雨やみてこそれちきる面白や　梧

柳生つるもの側の葱道　水

新なかく月てさり飛五十間　同

寂しさ秋戌女まなあてみり　梧

占くと上まく也まるさし世まし　水

乗せとてきしやうあのいく人の酒　仝

私との千萬倚るまの川増さ　梧

誰とやうむきたえへ見てる路　同

またれ雨乃くくうさ峠さえす過　水

ねふかもてつ絵へと雲雀鳴也　梧

一里は炭賣をいつも寵也　一井
かなひの芝は親氷る朝　嵐彈
さゝくは也正木なりし後の庭　胡及
肩に娘をつれ酒さよふ人　長虹
夕月は入さも早き嫁らさハ　嵐彈
たりうに鄰をつらくらむ秋　一井

里涼く踊る夜り二三日　長虹
宗旨ゟ妻とわかれし紙衾　胡及
問ハ紙くずも涙ハ袖の奥に化　一井
葛籠とくきて切なく文　嵐弾
うらくしも露紀なの夕陽をさらす　胡及
立しゆく東羊の越路雪鋤　長虹
なくてよきをあひてからち髪付　嵐弾
蛤さしてをしこむ女中や　一井

浦風さ脛吹まくる月涼し　長虹
みるもかしこ化紀伊の硯匣　胡及
兄者乃さし矢射て打る菊の陰　一井
蒜くらふ香を遠さくりけり　嵐弾
はるのくれ紙あてさし膳なるん　胡及
氏の子乃綿乃箱を落つて　長虹
またしきる内もさいくそを洗　嵐弾
座敷もをある数屋を稽古　一井

木もさゝにあるゝかなし松の枝　長虹

静にかゝる人〳〵乃真　胡及

此年となりて矣の跡もなき　一井

備くもせはしくつい寝入月　嵐弾

蒸るゝ障子の張残うそさびき　胡及

こさるゝ鉢ましさ志はむ菊の文　長虹

汐をさ掾入道の家のさかえ　嵐弾

衣引のかるくかゝし音　一井

毒なりと氏一ミ紙も吟ぬし　長虹

片風ゐらつる哉白雨　胡及

枚急きて端ふなき庭の園　一井

たち行姥をなす黒き庭九　嵐弾

ぬく〳〵と月見の志紙ぬも雲　長虹

見わたすかぎりさなつくし　胡及

京師三條通升屋町
御書物所
出雲寺和泉掾